

桜の前線は台湾から

佐野た香 ● 本会理事
高座日台交流の会会長



戦時中、私は神奈川県下の高座海軍工廠で、

女子挺身隊員として勤務しました。共に戦った台湾少年工の人たちも、今では皆が全寿を迎えました。戦後に台湾高座会、日本では高座日台交流の会が生まれ、今も春は日本で、秋には台湾で大会を開催し、交流が続いています。

台湾高座会の人たちは戦時中に志願して来日し、高座海軍工廠で戦闘機の生産に従事しました。その青春時代の証として、日本政府から卒業並びに在職証明書を受けたとき、それを高々と掲げて喜びました。そして「仰げば尊し」を合唱したときは思わず涙がこぼれました。

また、悲運にも戦歿した人たちは、靖國神社に祀られ、ご祭神となりました。毎年の春には高座会の人たちと共に必ず昇殿し、参拝してい

ます。

先ごろ台湾で、ある元少年工の方の葬儀に参列したとき、その棺に日本の軍艦旗が掛けられていました。そして「海ゆかば」の歌が奏せられたときは、胸が痛くなるほど感動しました。私たちはこんな台湾高座会の人たちに対して、どのように報いればよいのでしょうか。

日台の絆結びて幾星霜同じ高座のその名のもとに

日本李登輝友の会はこれまで台湾李登輝友会を通じて、南投県鹿谷郷竹林村、台南県「南部科学工業園区」、高雄県「澄清湖」、嘉義県「奮起湖」、台中市「台中公園」などに河津桜を寄贈し、その記念碑に名前が刻まれています。

また台湾高座会の縁により、国立雲林科技大

学に対し、当会の野口毅のぐちたけし名誉会長と私の連名で河津桜百本を寄贈しました。その苗木は台湾の農場で一年間養生したあと、昨年（平成二十一年）三月、校庭に植樹されました。

この植樹式は同大学の校庭で挙行され、台湾高座会の李雪峰会長、雲林区会の黄茂己会長、台中区会の何春樹会長、彰化区会の陳崇墩会長はじめ、多くの在校生も参加し盛会でした。

はじめに楊永斌校長から「桜の木と共に台湾を思う日本の人の心をいただきました」と心あたたまる言葉がありました。続いて、野口名誉会長が挨拶しました。

「いま、日本は台湾と国交こそありませんが、両国の間には地下水が流れていると思っております。私たちはこの地下水を汲み上げて世界に向けて噴水とし、台湾が晴れて国際社会の檜舞台にあがって来る日の夢を見えています。この桜の花が両国を結ぶ親善のしるしとなるように心から願っています」

引き続き、馮寄台・駐日代表、齋藤正樹・駐台代表からの祝辞が披露され、次いで鍬入れと

記念標識「友誼長存」の除幕が行われました。また、大学から植樹の記念牌をいただくなど、誠に晴れがましい式典でした。

雲林の校庭に咲く桜花「友誼長存」の碑は永遠に

また、昨年は高座海軍工廠時代の私たち女子挺身隊の名により、宜蘭市にも河津桜を寄贈しました。昨年十一月、台湾高座会の新莊大会に参加したとき、当会の会員一同が揃って宜蘭を訪問し、県政府の広場に植樹された桜の苗木を見ました。地元の宜蘭区会の林炯星会長、陳其鴻総幹事、同窓会の林燦桐会長や多くの会員の出迎えがあり、また、会場には市長や文化部長の出席のもとで植樹の感謝状をいただくなど、心のこもった歓迎を受けました。

これから毎年春になれば、桜の開花を知らせる前線は、きっと台湾から始まるでしょう。そして、その桜の花は日本と台湾を結ぶ親善の絆になると信じています。

台湾から桜前線のほりくる慕う第二の故郷目指して